

全国の被災者 教訓共有へシンポ

「語り部」世界共通語に

災害の教訓を共有し防災に役立てようと、各地の経験を話し合う「全国被災地語り部シンポジウム」が26日、兵庫県淡路市で開かれた。阪神大震災や東日本大震災、熊本地震などの語り部らが話し合い「活動を広げ、語り部を世界の共通語に」との声が上がった。27日まで2日間の予定。

「子供に教訓を分かりやすく説明するために作った紙芝居が好評」「語り部活動で訪問者が増えた」。会場には約430人が集まり、継承を巡る好例や課題について、メキを取るなど



淡路で開催 430人参加

継承事例や課題議論

兵庫県淡路市で開かれた「全国被災地語り部シンポジウム」(26日)

体されると、教訓が理解してもらいにくくなる」として「長く語り継ぐには、目で見て伝わる物言わぬ語り部も必要」と述べた。

雲仙・普賢岳の火山災害関連施設の雲仙岳災害記念館(長崎県島原市)の長井大輔学芸員は、2014年の御嶽山(長野、岐阜県)の噴火災害後、活火山を登る際の適切な装備について情報を発信。各地の災害と関連づける工夫をしたと紹介した。

阪本興立大の五百旗頭真理事長は、災害が多い日本では支え合いが不可欠だと指摘。記録を残し、防災や減災の研究を続け、世界や未来に教訓を残す重要性を訴えた。

して熱心に聞き入った。三陸ホテル観光おかみ、阿部憲子さんは震災遺構の重要性を指摘した。建物が解

2017/2/27 【日本経済新聞】

「語り部」世界共通語に